

荘厳な太陽

マカラ・サン克蘭ティを祝うアーラティー ライブ映像配信からの話

ガネーシュ・ラージャマニ

ナマスカール。

シッダ・ヨーガ・ユニバーサル・ホールの皆さんを心から歓迎します。

今日、1月14日、マカラ・サン克蘭ティを祝って、私たちはアーラティーに参加します。これはシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムのバガヴァーン・ニッティヤーナンダ・テンプルからライブ映像配信で行われます。

私は、ガネーシュ・ラージャマニです。家族と一緒にカリフォルニアのサンディエゴに住んでいます。そして現在は、セーヴァーをささげるために年末年始の休みを利用して、シュリー・ムクターナンダ・アーシュラムを訪れています。

マカラ・サン克蘭ティは、太陽神スーリヤ・デーヴァターの崇拝にささげられるインドの祝日です。今日太陽崇拝が行われる理由は、北半球では今が日照量が増えていく季節だからです。太陽は北に向かってウッタラーヤナと呼ばれる6カ月の旅を始めました。

太陽。私たちの惑星がその周りを回る——太陽系全体がその周りを回る——荘厳な太陽は、非常に多くの文化の伝統の中で高貴な位置を占めています。太陽は世界中で崇拝され、賞賛され、祝われています。

誰もが知っているように、何世紀にもわたって、科学者たちも太陽に大きな関心を示してきました。それは彼らの多くの調査と探究のテーマになっています。今日に至るまで、科学者たちは

太陽——その磁場、振動、地球の気候に与える影響——の研究を続けており、それによって私たちに最も近い(わずか 14,900 万キロメートルしか離れていない!)この星についてのより深い理解を私たちに提供してきました。

今日はインドのマカラ・サン克蘭ティの祝日を祝うので、インドの伝統において太陽がどのように崇拝されているかに焦点を当てて話をしたいと思います。

インドの多くの教典には、太陽を賛美する数々の美しい詩編が見られます。それらは太陽を、生命の源、すべての生き物の魂、闇を払う者、英知と神聖な知識の具現、世界の目撃者の輝きとして描写しています。そしてこれらは私のお気に入りの例のほんの一部です。教典は、太陽についてのこのような記述にあふれています。

シッダ・ヨーガの道において、基本的な修行の一つは「シュリー・グル・ギーター」の教典を朗唱することです。「シュリー・グル・ギーター」では、太陽をシュリー・グルとグルが与える知識の光の比喩として示しています。この教典はまた、グルを太陽の姿を通して輝く者として語っています。

太陽のイメージを用いた、さらにもう一つの教典は、古代インドで生まれた『リグ・ヴェーダ』です。この教典には、太陽への賛歌、「スーリヤ・ガーヤत्री・マントラ」が含まれています。これは、とても分かりやすく、とても力強いことから、『リグ・ヴェーダ』で最もよく朗唱されている賛歌の一つです。何百万人もの人々が「スーリヤ・ガーヤत्री・マントラ」を朗唱することで一日を始め——そして太陽が沈む時にもこのマントラを朗唱します。

私は「スーリヤ・ガーヤत्री・マントラ」を幼い頃に学びました。父や祖父、叔父たちから、毎朝 108 回朗唱するように教えられ、長年にわたり、これを実践しました。これらの朗唱から私がよく体験していた安らぎの記憶は、自分の存在の中で、いまだに鮮明に残っています。そして数十年たった今でも、私はこのガーヤत्री・マントラを朗唱し続けています。

「スーリヤ・ガーヤत्री・マントラ」からの言葉を紹介します。

ॐ भूर्भुवः स्वः

तत्सवितुर्वरेण्यं

भर्गो देवस्य धीमहि।

धियो यो नः प्रचोदयात्॥

*om bhūr bhuvah svah
tat savitur vareṇyam
bhargo devasya dhīmahi |
dhiyo yo naḥ pracodayāt ||*

このマントラの意味は次の通りです。

オーム。おお、大地よ、空よ、そして、天よ！

私たちが自らの内側に、神聖なサヴィトリ、

太陽神の輝きを据えますように。

やがてその神は、

私たちの洞察を目覚めさせるだろう。

既にご存じかも知れませんが——マカラ・サン克蘭ティを祝って、「スーリヤ・ガーヤत्री・マントラ」の録音が掲載された素晴らしいページが、シッダ・ヨーガの道のウェブサイトにあることを、私は皆さんにお知らせしたいのです。

「スーリヤ・ガーヤत्री・マントラ」を歌う時に誰もが使う、ある特定の旋律があります。同時に、多くの歌い手が、このマントラのために独自の旋律を作ります。シッダ・ヨーガの道のウェブサイトにあるこのマントラの旋律は、とてもよく知られた歌手であるインド人のシッダ・ヨーギによって、2018年にマカラ・サン克蘭ティのために作曲されました。

シッダ・ヨーガの道のウェブサイトで、「スーリヤ・ガーヤत्री・マントラ」のこの録音に合わせて、一緒に歌うことができます。録音は約 45 分間です。日の出に、日の入りに、一日のいつでも——そしてあなたにとって都合がいい時にいくらでも——どうぞ自由に利用してください。また、「スーリヤ・ガーヤत्री・マントラ」を声に出して朗唱するか、あるいは心の中で繰り返すか、選ぶこともできます。

太陽とその計り知れない力についてインドの教典で読んだことに、私は深く影響を受けてきたと言わざるを得ません。さらには、全体が全能の太陽を賛美して書かれた教典も実際に幾つかあるのです。

例えば、『スーリヤ・ウパニシャッド』では、賢人たちが太陽をこの上なく素晴らしく詩的な方法でたたえています。

太陽からすべての存在が生まれる。

太陽はそれらすべてを支えている。

太陽の中へ、それらはすべて融合する。

太陽とは何か、

私はそれである。ⁱ

太陽とはとても素晴らしく、とても興味をそそり、断然に魅惑的ではありませんか？ そして、シッダ・ヨーガの道を歩む私たちにとって、太陽は**精神的な目覚め**を思い起こさせます。

インドには、太陽神であるスーリヤ・デーヴァターにささげられた寺院も幾つかあります。有名な寺院の一つは、インド東部のオリッサ州にあるコナーラク太陽寺院です。ユネスコの世界遺産に登録されており、巨大な四輪馬車のような形をしています。教典ではスーリヤ・デーヴァターは四輪馬車で空を旅すると描かれています。

別の著名な寺院は、インド西部のグジャラート州にあるモーデーラにある太陽寺院です。この寺院は、スーリヤ・デーヴァターやさまざまな神々の多様な側面を描いた、複雑な石の彫刻で知られています。

インドの寺院でよく見られる儀式の一つは、アーラティー、神へ崇拝をささげることです。アーラティーが——特に朝に——行われる一つの理由は、寺院の神にあいさつし、敬意を表することで、その日一日を方向付けるためです。これらの神々の信奉者にとって、朝のアーラティーは非常に重要です。信奉者がアーラティーに参加することを望むのは、神の最初の一瞥(いちべつ)が自分たちに注がれることを切望しているからです。

ブラーミンの司祭が、神を優しく目覚めさせるためにマントラを歌います。そしてアーラティーが始まると、信奉者も歌い始めます。寺院に、人々の声と楽器の奏でる音楽が響き渡ります。それは、力強く楽しい体験です——そして、とても神聖です。アーラティーが歌われているこの瞬間は、宇宙のすべての粒子が神の光で目覚めているように思われます。

シッタ・ヨーガの道の母なるアーシュラム、インドのグルデーヴ・シッタ・ピートウでは、毎朝日の出前にアーラティーを行うことで、バデ・バーバにあいさつし、崇拝をささげます。

それから正午、太陽が空の一番高い所にある時にアーラティーが行われます。

そして夕方、太陽が一日を終えて沈もうとする時にアーラティーが行われます。

シッタ・ヨーガのアーシュラムで歌われるアーラティーは、シッタ・ヨーガの道において最も力強い修行の一つです。真実、音楽と言葉、音と光によって流れるエネルギーは、触れられるようです。

今日はマカラ・サンクランティを祝って、シュリー・ムクターナンダ・アーシュラムの上に太陽が昇る中、アーラティーを歌います。

プージャーリー——アーラティーをささげる人——が、バデ・バーバに向かってアーラティーのランプを揺らします。伝統的に、アーラティーの際に神に炎をささげる方法は数多くあります。さまざまな形と大きさ、さまざまな素材でできたトレーとランプがアーラティーをささげるために使われます。シッダ・ヨーガのアーシュラムでは、特にお祝いの日、プージャーリーはアーラティーのためにより大きなランプを使います。それには、私たちすべての中にある光を表す、多くの美しい炎がともされます。

プージャーリーがランプを揺らしている間、ミュージシャンがドラム、ほら貝、ベルを鳴らします。プージャーリーがアーラティー・ランプを揺らし終わると、アーラティーを歌います。

今日、マカラ・サンクランティをお祝いするアーラティーに参加する時——シッダ・ヨーガのサンガム全体と一緒に祈りをささげる時——あなたの意識の中で、このとても特別な焦点を保つことにお誘いします。

バガヴァーン・ニッティヤーナンダの黄金の姿に集中し、
そしてバデ・バーバを太陽の具現として思い描く。



© 2024 SYDA Foundation®. 著作権所有。

ⁱ Surya Upanishad; A. G. Krishna Warriar, Sāmānya Vedānta Upaniṣads (Chennai: Adyar Library and Research Centre, 1967), pp. 265-66; English rendering © 2024 SYDA Foundation.